

の街並みにすることは彼らの日本社会における一定の同化も示唆するが、中華風建築を残すことは日本社会が彼らを同質の者とは見なさずオリエン

タルイメージを彼らに求め続けることの表れでもある。

## 視覚障害者からみた都市環境—高田馬場を事例として—

高橋 花

少子高齢化をふまえ、高齢者や障害者にも利用しやすいまちづくりをめざす対策が増えている。なかでも視覚障害者は、視覚による街路空間の把握が困難であるため、移動の際にもっともバリアを感じやすいとされている。弱者にとって利用しやすい都市環境は、だれもが利用しやすいユニバーサルデザインの創出に効果的であると考えられる。

視覚障害者は、自動車等の運転は不可能なため、歩行による移動が多い。歩行についての予備調査では、日常的な外出行動に際しては、各自の障害の程度に応じて歩行の手がかりを探し、それらを結ぶルートを想定していることがわかった。手がかりは、音・匂い・人や車の流れなど、個人によってさまざまである。これに対し、都市環境のなかで遭遇するバリアの多くは共通であり、放置自転車や路上駐車などの予測不可能なバリアに集約される。

このような背景をふまえ、程度の異なる障害を持つ視覚障害者に対して、東京都新宿区高田馬場1丁目での通学行動に同行し、歩行環境を調査した。その結果、視覚障害者は、一般に人通りの多い場所を避けて歩行することがわかった。移動の際に人や各種のバリアに接触することが大きなストレスとなるためである。さらにアンケート調査を実施した結果によると、白杖を利用しているか否かで周囲の対応に差があることがわかった。白杖利用者はその外見から視覚障害者として容易に

認識され、周囲からの配慮を受けることが多い。

調査地域は、ターミナル駅の近接地域であり、昼間人口が多く人口が流動する特徴をもつ。住・商・業務・教育などの各機能が混在し、地域の周縁部は幹線道路に囲まれた商業地域であり、内部は住宅が密集している。幹線道路沿いは交通量が多く、人通りが絶えないため、住宅地内部の狭い街路は、車両や歩行人の抜け道として利用される。この際、人通りを避けて歩行している視覚障害者との接触が起きる。調査地域では、誘導ブロックや盲導チャイムなど視覚障害者関連の設備が充実していることから、晴眼者も視覚障害者の存在をある程度認識してはいる。しかし白杖を利用しない視覚障害者の存在は意識されていない。また晴眼者の多くは視覚障害者の行動に対しての知識がないため、配慮不足が感じられる。視覚障害者は誘導ブロック上のみを伝って歩くとの誤解から、誘導ブロック上は避けていても付近に駐輪してしまい、衝突が起きる。調査地域でも、予備調査の結果と同様に、放置自転車などのバリアに悩まされていることがわかった。

こうした状況の改善のために、新宿区でも撤去作業や条例改正などの対策を行っているが、ほとんど効果はない。視覚障害者への理解を促す教育などソフト面の対策が求められるが、流動が激しいために、昼間人口層には教育の機会が与えられにくく、現状では意識の改革が困難である。

## 厚木基地と周辺の地域社会

橋本 弥沙

厚木基地は神奈川県の大和市・綾瀬市の密集した市街地に位置し、飛行訓練によって生じる騒音は周辺住民に多大な被害を与え続けている。本論文は、厚木基地の実態を捉え、行政が行っ

ている基地対策を総括し、住民の基地に対する意識を調査したうえで、基地と周辺地域社会との関係を明らかにすることを目的とした。

厚木基地は約507k m<sup>2</sup>の広大な面積を有し、綾